

検査情報月報



2011
2010
4月

横浜市衛生研究所

平成 23 年 4 月号 目次

【トピックス】

平成 22 年度 医動物・種類同定検査のまとめ (10～3 月) 1

平成 22 年度 食品等の苦情品検査 (10～3 月) 4

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 平成 23 年 3 月 8

【情報提供】

衛生研究所 WEB ページ情報 (平成 23 年 3 月分) 13

平成 22 年度 医動物・種類同定検査のまとめ（10～3 月）

医動物担当では、市民、各区福祉保健センター、各市場検査所、事業者などの依頼を受け、昆虫類を中心とした種類同定検査を行っています。昆虫類の種類を同定することによって、発生源、発生時期、人に対する害などが分かるため、効果的な対策を立てることにつながります。平成 22 年 10 月から平成 23 年 3 月の種類同定検査件数は、14 件でした。内訳は昆虫類 10 件（ハチ目 4 件、チョウ目 2 件、シミ目・カメムシ目・ハエ目・コウチュウ目各 1 件）、その他 4 件でした。

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
網戸を抜けて虫が家の中へ入ってくる	 雄有翅虫、黒色、約 2mm	ヤマアリの亜科の有翅虫(雄成虫) (ハチ目)	本科は、温帯地方では大型で活発な種類を含み、地上活動性の種も多い。営巣場所は多くの種では地中である。アリ類は決まった時期、無数の有翅虫(雌雄成虫)が結婚飛行のため巣から飛び立つ。種類によって結婚飛行の時期は異なる。飛行を終えた雄成虫は、灯火、窓際に多数飛来し、不快害虫となることが多い。
一戸建ての屋根付近から、羽アリが大量に出てくる	 雌有翅虫、黒色、約 4mm	ヤマアリの亜科の有翅虫(雌雄成虫) (ハチ目)	生態は同上
ベランダの壁面やテーブル、イスに綿状のものがあり、幼虫が多数付着している	 若齢幼虫、褐色、約 0.5mm	チョウ目(ガ)の若齢幼虫	ガ類の幼虫は農作物、果実、樹木などの害虫で、極めて多食性のものが多い。
戸建住宅 1 階和室のタタミの裏に、幼虫が多数発生していた	 幼虫、淡褐色、約 13mm	ニセコクマルハキバガ幼虫 (チョウ目 マルハキバガ科)	成虫の出現期は、初夏から初秋にかけて、北海道、本州にみられる。
一般家屋内の天井から虫が落下してくる	 成虫、淡灰色、約 5mm	シミ科の一種 (シミ目)	多くの種は野外に住み、腐食物を食べているが、一部の種類が家屋に住みつき、書籍や掛け軸、壁紙などを食害する。夜間活動性で、暗いところを好む。

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
駐車場付近の樹木に多数のアブラムシが寄生している	 幼虫、淡黄色、約1mm	ヤノイスフシアブラムシ (カメムシ目)	本種はイスノキの葉(冬寄生植物)に虫こぶを作り、その中で増殖する。夏寄生植物はコナラ、ミズナラで体が円形の無翅型が葉裏に寄生する。アブラムシ類は寄生植物に口針を差し込んで汁液を吸う。 吸汁中のアブラムシは、肛門から透明な液(甘露)を出すことが知られている。
工場内で虫がみられた	 成虫、茶褐色、約2mm	キノコバエ類の一種 (ハエ目)	小形あるいは中形で、頭部は小さい。 成虫は湿気の多いところ、薄暗いところ、腐った植物や樹木の周囲などに生息する。 幼虫は湿った土や落ち葉、木材などに群生する。 夜間、灯火に飛来する。
室内にコウチュウが多数みられる	 成虫、褐色、約3mm	ヒメヒョウホンムシ (コウチュウ目ヒョウホンムシ科)	ヒョウホンムシ科のものは乾燥動植物質を食べ、一般家屋や食糧貯蔵庫、製粉工場などで見つかる。世界共通種。
平屋(プレハブ造)の天井から粉状のものが落ちてくる	 木片、茶褐色	木片 ハチ目の体の一部、 ハチ目の蛹殻	 ハチ目の体の一部
1階屋根裏で土の塊を発見した	 土状、褐色	イエシロアリの 蟻道  職蟻  兵蟻 たいさい 大腮(上顎)	土の中に、木材成分とイエシロアリ職蟻の大腮(上顎)と兵蟻の大腮が認められた。 虫体は認められなかった。 イエシロアリは、建築物内、あるいは地下に木材や排泄物などを加工した大きな巣を造り、巣から蟻道を通じて加害場所に移動する。
木造戸建住宅の玄関ドア枠の下部(木製)が虫に食害されていた	 黒色、約2~6mm	シロアリ類の蟻道	シロアリ類は、土、木材成分、シロアリ類の排泄物と分泌物などで蟻道を作る。 木片に付着していた土の中に、シロアリ類の大腮(上顎)が数個認められた。 なお、虫体は認められなかった。
自宅居室で糞のようなものを見つけた	 黒色、約25mm	ネズミの糞	 検体内容物 糞の内部に多数の毛昆虫片が認められた。

「羽アリ」と「アリの結婚飛行」



毎年春先になると「羽アリ」が、灯火や窓際にたくさん飛んでくるため、不快害虫として相談が寄せられます。「羽アリ」は羽のはえた雌アリと雄アリです。「アリ」は、社会生活をする昆虫で、世界では約8,800種、日本では約270種が知られています。ここでは、「クロオオアリ」を一例として、その興味深い営みを紹介します。



〈結婚飛行からすべてがはじまる！〉

クロオオアリ(ヤマアリ亜科)の一生は結婚飛行からはじまります。毎年5から6月頃の雨上がりで蒸し暑く、風の弱い午後になると、翅の生えた雄アリと雌アリ(女王アリ)が、巣からつぎつぎと出てきて、空中に飛び出します。これは、「結婚飛行」と呼ばれ、近親結婚を避けるために、2,3県合わせたほどの地域で一斉に行われ、飛び出したアリは、空中で交尾をします。

この結婚飛行の時期は、アリの種によって決まっています。早い種は3月下旬からはじまり、遅い種では11月頃まで続きます。

また、ひとつの巣を連続して観察したところ、クロオオアリでは1シーズンに1つの巣から飛び出す雄アリは数百匹、雌は数十匹と推定されました。



ヤマアリ亜科の雌アリ(女王アリ)

〈結婚飛行後の雄アリと雌アリの運命は・・・〉

結婚飛行が終わると、女王アリは地上に降りて自ら翅を落とします(地中では、邪魔なため)。そして、1匹で地面に巣穴を掘ります。

一方、雄アリは、結婚飛行が終わると力尽きて死んでしまいます。女王アリは雄アリから受け取った精子を受精囊という袋に蓄えておくことができるため、雄アリは必要なくなるのです。



ヤマアリ亜科の雄アリ

〈女王アリの寿命は10～20年〉

交尾を終えた女王アリは、その後巣の中で、10個ほどの卵を産み、子育てをします。そうして最初の働きアリが誕生します。働きアリは餌集めや幼虫の世話をし、女王ア리를助け、一方、女王アリは、その後も10～20年間、卵を産みつけます。巣が成熟すると、働きアリの数は、1,000匹ほどにもなります。

働きアリはすべて雌アリですが、幼虫のときに十分な栄養が与えられないため体が小さく、また女王アリのフェロモンで卵巣の発達が抑えられ、卵は産みません。働きアリの寿命は1.5～2年で、女王アリに比べ短命です。

雄アリは繁殖期を除いて、巣の中には見られません。



クロオオアリの働きアリ

シロアリの交尾は？

翅の生えたアリをみると、「シロアリ！」と考えてしまいがちですが、「シロアリ」と「羽アリ」は全く違う種類です。

「シロアリ(シロアリ目)」は、木造建築物の大害虫で、ヤマトシロアリ、イエシロアリなどがいます。シロアリも社会性昆虫ですが、生殖能力をもった有翅虫の雌と雄が、群飛後、巣を作り、巣中で交尾し、産卵することによって、コロニーを維持します。結婚飛行により空中で交尾し、女王アリが単独で巣を作る「アリ」とは、生態が異なります。ヤマトシロアリの場合、群飛は4～5月に行われるため、結婚飛行の羽アリとの鑑別が重要となります。



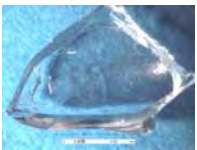
ヤマトシロアリの有翅虫

参考文献: 日本産アリ類全種図鑑(学研)、アリの生態(明玄書房)、蟻の結婚(法政大学出版局)
生活害虫の事典(朝倉書店) 【検査研究課 医動物担当】

平成22年度 食品等の苦情品検査(10～3月)



-食品添加物担当で行った理化学検査-

平成22年度下半期に、福祉保健センター等に届けられた食品等に関する苦情品の中で、原因究明のために食品添加物担当へ搬入された検体は26件39検体でした。苦情の内容は様々ですが、異物混入が多くみられました。理化学検査を中心に行ったうち主な検体の検査結果は次のとおりです。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
しょうが焼き定食中の異物 	飲食店でしょうが焼き定食を食べた客から、付け合わせのキャベツに黒色の異物があると苦情が寄せられた。	外観 磁性 燃焼性 赤外分光分析 結果	大きさ2～3mmのものが2個、1mm以下のものが複数個の黒い炭状の固まり。ピンセットでつまむとポロポロと形が崩れた。 磁性は認められなかった。 熱すると紙が燃える様な臭いがして、白く灰化した。 燃焼後のスペクトルはリン酸カルシウムのもものと類似していた。 有機物が炭化したものと推定された。
フルーツジュレ中の異物(給食) 	児童が給食の「フルーツジュレ」を食べたところ、口の中から透明な固い異物が出てきた。	外観 鏡検 赤外分光分析 結果	大きさ7.1mm×5.0mm、重さ41mg。無色透明な不定形のガラス様異物。 鋭くかけた角や、縦に走るスジ状の断面を認めた。 ガラスと同様な赤外吸収スペクトルを認めた。 ガラスの破片と推定された。
ハンバーグ弁当中の異物 	弁当屋で購入したハンバーグ弁当を食べたところ、金属様の異物が出てきた。	外観 磁性 マイクロアナライザー 結果	長さ6.5cm、幅0.7mm、重さ13mg。銀色のテープ状の金属片。なお、残品について内容物を確認したところ、同様な異物は認められなかった。 磁性を認めた。 鉄、クロムの元素を認めた。 形状や成分から、ステンレス製の金属タワシの一部と推定された。
生揚げの甘辛煮中の異物(給食) 	児童が給食の「生揚げの甘辛煮」を食べていたところ、針金のような異物が出てきた。	外観 磁性 マイクロアナライザー 結果	長さ14mm、直径0.17mm、重さ4mgの細かく波打っている針金状の物質。両端は斜めに切断されていた。 磁性は認められなかった。 鉄、クロム、ニッケルの元素を認めた。 ステンレス製の針金と推定された。
いか塩から	いか塩からを食べて1時間後に舌に蕁麻疹様の症状が出たため、ヒスタミンの検査依頼があった。	ヒスタミン	HPLCで分析したところ、不検出であった。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
焼めし中の異物 	飲食店で焼めしを食べていたところ、ガラス様の異物が入っていた。	外観 赤外分光分析 マイクロアナライザー 結果	大きさ7.9mm×2.3mm、重さ25mg。無色透明なガラス様の異物。 ガラスと同様な赤外吸収スペクトルを認めた。 酸素、ケイ素、ナトリウム等の元素を認めた。 ガラスの破片と推定された。
食缶中の異物 (給食) 	児童がスープを配膳していたところ、食缶の底に金属異物が入っているのを発見した。	外観 マイクロアナライザー 結果	長さ2.4cm、太さ1.2mm、重さ0.2g。銀色の針金状のものが丸くなったような形状の異物。 ニッケルおよびアルミニウムの元素を認めた。 ニッケルを主成分とする金属と推定された。
ミニクリームパン中の異物 	食べようと半分に分ったところ、黒色異物を発見した。	外観 鏡検 電子顕微鏡 結果	大きさ7mm×4mm、重さ5.2mg。薄皮状の茶色(あずき色)の破片。 表面は平滑でつやのある薄茶色であった。 表面に細かなへこみが多数あり、対照品のあずきの皮と類似の構造であった。 対照のあずきの皮と外観、顕微鏡画像とも類似しており、あずきの皮の一部と推定された。
生中華めん中の黒い異物 	納入されためんに黒い異物が練りこまれていた。	外観 鏡検 鉄分 燃焼性 結果	めんの外側および中心部分に平らに挟み込まれた黒い部分が多数認められた。黒い部分は水に浸けるとろく崩れた。 黒い部分の表面はざらざらしていた。 わずかに認めた。 黒い部分を燃やすと白く灰化した。 鉄をわずかに含む有機物の固まりと推定された。
ハンバーグ中の異物 	レトルト食品のハンバーグを食べたところ、骨様異物が入っていた。ざらざらした触感だったので、まだ残品に同様の異物が入っているのではとの苦情が寄せられた。	外観 鏡検 溶解性 赤外分光分析 マイクロアナライザー 結果	大きさ4mm×3mm、2mm×1mm、1.5mm×1mm、重さ3個の合計は7mgで、不定形の白色骨様の異物。なお、残品からは類似の異物は認められなかった。 全体的に白色で、所々薄茶色の部分を認めた。 塩酸を滴下したところ、発泡し溶解した。 骨と同様な赤外吸収スペクトルを認めた。また、灰化後のものはリン酸カルシウムと同様な赤外吸収スペクトルを認めた。 リン、カルシウム等の元素を認めた。 骨の破片と推定された。
缶詰の底に付着した白色異物 	豆の缶詰を開けたところ、缶底に白い固まりが見えた。	外観 電子顕微鏡 溶解性 マイクロアナライザー 結果	缶の内底に白色の付着物を3か所認めた。 付着物を拡大すると、微細な粒子の集まりを認めた。 塩酸を滴下したところ、発泡し溶解した。 リン、カルシウム、鉄等の元素を認めた。 リン、カルシウム、鉄等を含む無機塩の析出物と推定された。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
イクラ正油漬中の異物 	商品を陳列中に白い球状の異物を発見した。	外観 鏡検 電子顕微鏡 マイクロアナライザー 赤外分光分析 ニンヒドリン反応 結果	直径3mm、重さ12mgの淡黄色で球状の異物。表面には多数の細かいスジがあり、薄い層が重なりあった状態であった。また異物はもろく、力を加えると半分に割れた。 断面を拡大すると帯状の層が並んだ構造が認められた。 炭素、窒素、酸素、イオウ等の元素を認めた。 タンパク質と同様の赤外吸収スペクトルを認めた。 陽性。 タンパク質の固まりと推定された。
肉じゃが中の異物(給食) 	児童が肉じゃがを食べているとき、金属片を発見した。	外観 鏡検 磁性 マイクロアナライザー 結果	長さ27mm、幅0.4mm、厚さ0.04mm、重さ3mg。銀色のテープ状の金属片。 片方の面に縦に走るスジ状模様を認めた。 わずかに磁性を認めた。 鉄、クロム、ニッケルの元素を認めた。 ステンレス製の金属と推定された。対照品(製造施設内器具に付着していた金属片)と形態や組成が類似していた。
胚芽ごはん中の異物(給食) 	児童が配膳をしていたところ、配達された飯缶から黒い棒状の異物を発見した。	外観 鏡検 電子顕微鏡 対照品との比較 マイクロアナライザー リグニン(木質素)反応 赤外分光分析 結果	大きさ9mm×0.7mmと6mm×0.7mm、重さ合計4.7mg。2個の褐色棒状の異物。 表面は褐色で一方向に細かなスジが多数あり、断面の内側は白色であった。 断面を拡大すると、植物特有の網目状の構造を認めた。 当所で用意した箸の繊維と色および形状が類似していた。 炭素および酸素の元素を認めた。 陽性。 当所で用意した箸の繊維(セルロース)と同様の赤外吸収スペクトルを認めた。 植物繊維と推定された。
きゅうり表面の付着物 	選別所で箱詰めされたきゅうりにピンク～茶色の微小な異物が付着していた。	外観 鏡検 電子顕微鏡 マイクロアナライザー 赤外分光分析 ヨウ素デンプン反応 結果	大きさ1.7mm×1.6mmと1.4mm×1.0mm、重さ合計2.6mg。大小2個のピンク色の小さな固まり。 異物の断面を拡大すると、外側がピンク色で内部は白色であった。 表面には細かな凹凸が多数あり、所々に結晶状の部位を認めた。 主に炭素、酸素および窒素の元素を認めた。また、所々カルシウムやリン等の元素を微量認めた。 デンプンと類似した赤外吸収スペクトルを認めた。 陽性。 異物の主成分はデンプンと推定された。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
すきやき弁当中の異物 	購入した弁当に針金が入っていた。	外観 鏡検 磁性 マイクロアナライザー 結果	長さ17mm、太さ0.3～0.4mm、重さ20mg。銀色で両端が同方向に曲がっている針金状の金属物。 両先端は尖っており、全体的にスジ状模様が認められた。表面の一部に凹んだ箇所が見られた。 磁性を認めた。 亜鉛および鉄の元素を認めた。 亜鉛および鉄から成る針金片と推定された。また、対照品(ステープラの針)と形状および材質が類似していた。
大紅辣椒干(唐辛子)の袋詰	未開封食品包装袋の中に蛾と思われる成虫および幼虫が混入していた。ピンホールの有無を検査してほしいとの依頼があった。	空気漏れ試験	検体は未開封品であり、水に漬けて検査をしたところ、包装袋にピンホールは認められなかった。 (虫体については、医動物担当で検査したところ、ノシメマダラメイガと同定された。)
マグロの吸水シートに付着した白い粉 	パックされた「マグロの切り落とし」の上に載っていた吸水シートに白い粉が付いていた。	外観 性状 赤外分光分析 炭酸水素塩 ナトリウム 結果	重さ56mgの白い粉の固まり。ぬれた状態で、吸水シート上に付着していた。 水に溶け、アルカリ性を示した。 炭酸水素ナトリウムに類似した赤外吸収スペクトルを認めた。 陽性。 陽性。 炭酸水素ナトリウムと推定された。

【検査研究課 食品添加物担当】

感染症発生動向調査委員会報告 3月

《今月のトピックス》

- コレラの報告の届出がありました。海外での感染と思われます。
- A型肝炎の届出がありました。
- インフルエンザの流行がまだ継続しています。
- 平成23年2月から報告対象になったアシネトバクター感染症の報告はありませんでした。
- 大震災後の混乱で、第11週の定点報告状況に影響が及んだ可能性があります。

全数把握疾患

<コレラ>

3月は24日現在で1例の報告がありました。O1エルトル小川型でした。フィリピン(セブ島)での感染と思われます。コレラの定義は、コレラ毒素(CT)産生性の *Vibrio cholerae* O1及びO139が確認された症例です。

O1またはO139抗血清に非凝集性の場合、*V. cholerae* non-O1、non-O139 あるいはnon-agglutinable *Vibrio* (ナグビブリオ)と総称されます。

1961年から今日まで続いている第7次世界流行のコレラはエルトル型によるものですが、インドベンガル湾で最初に見つかった、*V. cholerae* O139はインド亜大陸や東南アジアでも分離されています。ナグビブリオによる下痢症は、感染症法上の5類感染症である感染性胃腸炎として、また食品衛生法上の食中毒としての届出になります。コレラについてはこちらを御覧ください。

横浜市衛生研究所HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/cholera1.html>

<細菌性赤痢>

タンザニアでの感染と思われます。

渡航予定のある方は、事前に厚生労働省検疫所FORTH(海外で健康にお過ごしいただくための情報サイト)のご利用をお勧め致します。 FORTH(For traveler's health) <http://www.forth.go.jp/>

<腸管出血性大腸菌感染症>

3月は24日現在で2件の報告がありました。感染経路は不明です。

<A型肝炎>

A型肝炎ウイルスは、糞口感染で、約1ヶ月の潜伏期間を経て発病しますが、感染後約1週間～発病後数か月の長期間ウイルスを排出しますので、2次感染対策が重要です。

小児の約90%は不顕性感染ですが、年令と共に顕性感染の割合が増え、成人の90%が発症し、時に劇症肝炎や死亡例まで見られる疾患です。

全国での報告数は、2007年～2009年までは54件、60件、38件と散發程度でしたが、2010年では春先からA型肝炎の全国的な報告増が見られ、1年間で346件の報告がありました。

A型肝炎の血清型は1種類ですが、遺伝子型はI～VI型に分類され、人からは主にI、III型が検出さ

れます。昨年の流行状況の全国的な調査では、従来日本に常在していた I A型に加え、フィリピンと関連のあるgenotype I A型、韓国で大流行したgenotype III A型の3つのクラスターが確認されました。

今年も引き続き注意が必要です。

A型肝炎についてはこちらを御覧ください。

横浜市衛生研究所HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/hav1.html>

国立感染症研究所HP <http://idsc.nih.go.jp/iasr/31/368/tpc368-j.html>

<レジオネラ>

3月は24日現在で2件の報告がありました。感染経路は不明です。

レジオネラについてはこちらを御覧ください。

横浜市衛生研究所HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/legionellosis1.html>

<麻疹>

3月は24日現在で2件の報告がありました。2件とも臨床診断での届出でした。1件はMRワクチン接種3週間後でした。数年前の首都圏での麻疹の大流行と、強化された予防接種制度の影響で、修飾麻疹の割合が増えていると思われるので検査診断が重要です。

昨年の市内の麻疹の届出は当初62件でしたが、検査結果や臨床経過等の判断で30件の取り下げが見られ、最終的に32件となりました。中には、麻疹IgM抗体陽性ではあるものの、届出後の経過で伝染性紅斑と判断され、取り下げになったものもあります。

成人の伝染性紅斑は典型よりは重症感が強く、誤診になる可能性があります。IgM抗体は、突発疹や伝染性紅斑等ウイルス疾患の交差反応で弱陽性を示しますので注意が必要です。万が一、IgM抗体偽陽性で麻疹と誤診されますと、その後の麻疹の定期予防接種を受けない等の不利益も予想されますので、検査診断が重要です。

衛生研究所では、2010年4月から、適切な時期に採取された検体の検査を行い、3件の麻疹ウイルスを確認いたしました。3件とも輸入例で、インドのgenotype D8が1件と、フィリピンのgenotype D9が2件です。

麻疹についてはこちらを御覧ください。

横浜市衛生研究所HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/measle1.html>

定点把握疾患

平成23年2月14日から3月20日まで(平成23年第7週から第11週まで。ただし、性感染症については平成23年2月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成23年 週一月日対照表

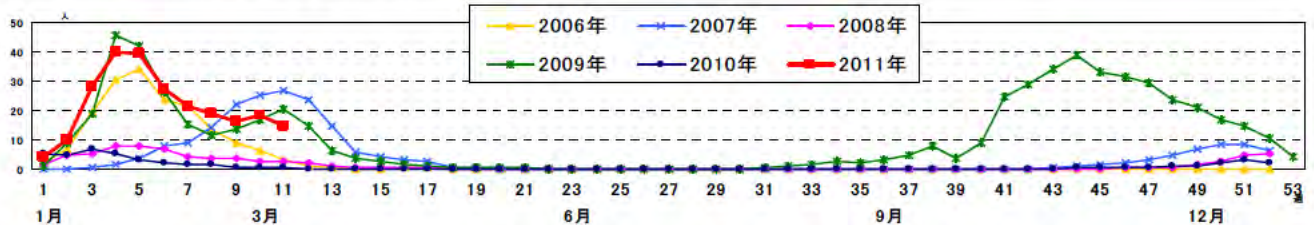
第 7 週	2 月 14～20 日
第 8 週	2 月 21～27 日
第 9 週	2 月 28～ 3 月 6 日
第 10 週	3 月 7～13 日
第 11 週	3 月 14～20 日

1 患者定点からの情報

市内の患者定点は、小児科定点:91 か所、内科定点:59 か所、眼科定点:18 か所、性感染症定点:26 か所、基幹(病院)定点:3 か所の計 197 か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の 11 感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計 150 定点から報告されます。

<インフルエンザ>

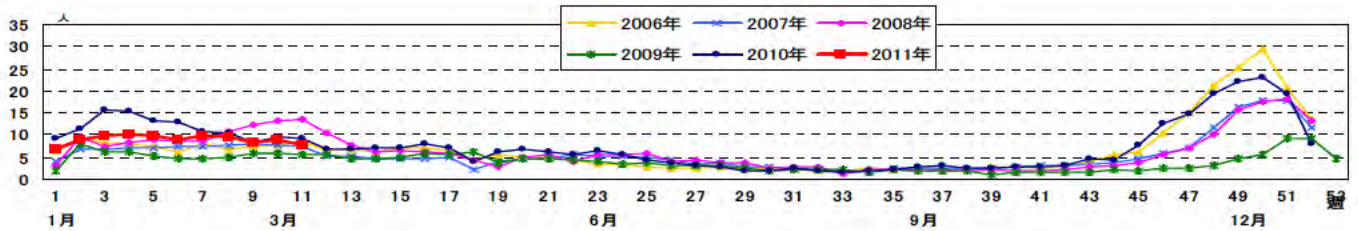
第11週は定点あたり15.00でした。第10週の18.29より微減していますが、3月11日(金)から本日に至る公共交通機関の乱れと、14日(月)から始まった計画停電等の影響もあり、定点医療機関の診療時間が影響している可能性もありますので、楽観は出来ないと思われます。計画停電の無い西区では、第10週は9.00、第11週は17.60と倍増しています。全ての定点医療機関にご協力をいただいている迅速キットの内訳では、A型302件、B型1,276件、A型B型共に陽性が10件でした。



全国では17.25、神奈川県では16.52、川崎市では16.91、東京都では15.28でした。また、薬剤耐性を示唆する遺伝子変異が、今シーズンでは、A新型が3件、A香港が1件認められました。B型では、ビクトリア系統が検出されていましたが、山形系統も1件検出されています。

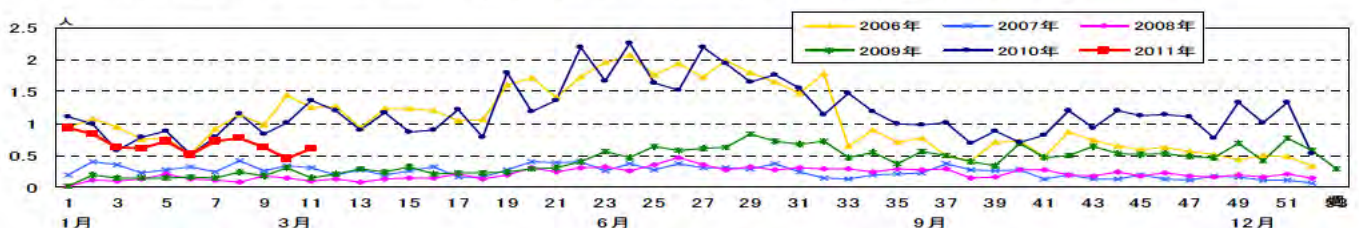
<感染性胃腸炎>

第11週は定点当たり7.56でした。行政区別では、神奈川区が第11週は16.40と高めです(第10週は22.00)。全国では9.38、神奈川県6.86、川崎市8.09、東京都8.17でした。



<流行性耳下腺炎>

第11週は定点当たり0.61でした。過去5年との比較では、流行した2006年、2010年に比較するとやや落ち着いてきた感じです。全国では0.97、神奈川県0.51、川崎市0.45、東京都0.25でした。



<性感染症>

性感染症は、産婦人科系の10定点、および泌尿器科・皮膚科系の17定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。2月は、性器クラミジア感染症は男性18件、女性8件でした。性器ヘルペス感染症は、男性5件、女性7件でした。尖圭コンジローマは、男性5件、女性1件でした。淋菌感染症は、男性10件、女性0件でした。

< 基幹定点週報 >

細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告は、今年に入って1件もありません。マイコプラズマ肺炎は、第4～6週に計4件ありました。

< 基幹定点月報 >

2月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症3件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症0件、薬剤耐性緑膿菌感染症1件、薬剤耐性アシネトバクター感染症0件でした。

尚アシネトバクター感染症は、この2月分から報告対象になった新しい感染症です。多剤耐性アシネトバクターにつきましては、こちらを御覧ください。

横浜市衛生研究所HP <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/acinetobacter1.html>

国立感染症研究所HP <http://idsc.nih.go.jp/iasr/31/365/inx365-j.html>

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときにのみ行っています。

< ウイルス検査 >

3月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点 20 件(鼻咽頭ぬぐい液 17 件、直腸ぬぐい液 3 件、内科定点 2 件(鼻咽頭ぬぐい液)、基幹定点 6 件(鼻咽頭ぬぐい液 5 件、髄液 3 件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点はインフルエンザ 11 人、上気道炎 3 人、下気道炎 2 人、胃腸炎 2 人、RS ウイルス感染症、突発性発疹症各 1 人、内科定点はインフルエンザ 2 人、基幹定点はインフルエンザ(疑い例を含む)2 人、脳症、無菌性髄膜炎、下気道炎、その他各 1 人でした。

4月8日現在、小児科定点のインフルエンザ患者9人と上気道炎患者2人からインフルエンザウイルスB型、インフルエンザ患者2人からインフルエンザウイルスAH3(以下AH3)型、内科定点のインフルエンザ患者2人からB型、基幹定点のインフルエンザ患者1人からAH3型が分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点の胃腸炎患者2人からノロウイルスG2型、RSウイルス感染症患者1人からRSウイルスの遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

【検査研究課 ウイルス担当】

<細菌検査>

3月の感染性胃腸炎関係の受付は小児科定点からの検体はありませんでした(表)。基幹定点からは菌株受付が1件、定点以外の医療機関等からは2件あり、*S. sonnei*、*V.cholerae*(エルトール小川型)がそれぞれ1件ずつでした。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は小児科定点からの6件で、すべてからA群溶血性レンサ球菌が検出されました。その血清型はT1、T4、T25でした。

バンコマイシン耐性腸球菌感染症の受付は定点以外の医療機関からの1株でvanB遺伝子が検出されました。

表 感染症発生動向調査による病原体調査(3月)

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別	3月			2011年1～2011年3月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
件数	0	1	2	1	14	4
菌種名						
赤痢菌			1		1	1
腸管病原性大腸菌						
腸管出血性大腸菌						1
腸管毒素原性大腸菌						
パラチフスA菌					2	
コレラ菌			1			1
不検出		1		1	11	1

その他の感染症

検査年月 定点の区別	3月			2011年1～2011年3月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
件数	6	3	1	14	4	16
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌	T1	3		5		
	T4	2		2		
	T12			3		
	T25	1		1		
	T B3264			1		
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌		3			4	
バンコマイシン耐性腸球菌			1			15
不検出				2		1

* 定点以外医療機関等(届出疾病の検査依頼)

T(T型別):A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【検査研究課 細菌担当】

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 平成23年2月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 平成23年3月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

今回は、平成23年2月のアクセス件数、アクセス順位及び平成23年3月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については総務局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (平成23年2月)

平成23年2月の総アクセス数は、185,235件でした。主な内訳は、感染症63.0%、食品衛生12.3%、保健情報10.0%、検査情報月報4.9%、生活環境衛生1.4%、薬事1.1%でした。

(2) アクセス順位 (平成23年2月)

2月のアクセス順位(表1)は、第1位が「マイコプラズマ肺炎について」、第2位が「衛生研究所トップページ」、第3位が「感染症発生状況」でした。

第1位は「マイコプラズマ肺炎について」でした。

国立感染症情報センターの報告によると、マイコプラズマ肺炎の定点当たりの報告数(5~8週(1/31~2月27日))は、6週(2/7~13)で、減少しましたが、その後増加しています。今年に入り、過去5年間の同時期と比較して、多い状況で推移しています。

マイコプラズマ肺炎については、季節による報告数の増減がさほど著しくないこともあり、年間を通じて常にアクセス数が多く、上位にランクインしています。

第2~4位は「衛生研究所トップページ」、「感染症発生状況」、「横浜市感染症情報センター」でした。

これらは、「インフルエンザ」や「感染性胃腸炎」等の市内発生状況をタイムリーに掲載しているページです。2月に入り、インフルエンザや感染性胃腸炎等、冬季における感染症の流行期に入り、アクセス数が増加したものと思われます。

第5位は「アシネトバクター感染症について」でした。

平成22年9月に帝京大附属病院で、多剤耐性菌アシネトバクター・バウマニ(MRAB)による大規模な院内感染があり、死者を出す集団感染が判明して危機感が高まりました。

このため厚生労働省は、平成23年2月から多剤耐性アシネトバクター感染症を、全国の470指定医療機関を対象とした「五類感染症・基幹病院定点(月報)」としての報告を義務付け、発症動向調査を行い、全国的に対策を促すことになり、関心が高かったものと思われます。

第6位は「ヘモフィルス・インフルエンザb型菌(Hib)感染症について」でした。

ヘモフィルス・インフルエンザb型菌(Hib)は、小児(ほとんどが5歳未満の幼児で発症し0歳児に多発)の

表1 平成23年2月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	マイコプラズマ肺炎について	7,643
2	衛生研究所トップページ	4,393
3	感染症発生状況	3,361
4	横浜市感染症情報センター	3,159
5	アシネトバクター感染症について	2,844
6	ヘモフィルス・インフルエンザb型菌(Hib)感染症について	2,591
7	サイトメガロウイルス感染症について	2,541
8	サルモネラ感染症(食中毒)について	2,399
9	ロタウイルスによる感染性胃腸炎について	2,368
10	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	2,303

データ提供:総務局IT活用推進課

細菌性髄膜炎の主要な原因といわれています。細菌性髄膜炎は、初期の診断が難しく、かかると治療が困難な疾患です。また、治療には、抗菌薬を使いますが、最近、抗菌薬の効きにくいHibが増加しています。これらのことから、早い時期にワクチン接種を受けることが発症予防の効果につながると考えられます。

しかし、一部市町村でワクチン接種後の死亡例が発生したことから、厚生労働省は、平成23年3月4日に「小児用肺炎球菌ワクチン」及び「ヒブワクチン」接種を一時見合わせましたが、専門家の会議で評価を行った結果、安全性上の懸念はないとされたため、厚生労働省の決定に基づき、横浜市においてもワクチン接種を平成23年4月1日から再開しています。

(3) 電子メールによる問い合わせ（平成23年3月）

平成23年3月の問い合わせは、2件でした(表2)。

表2 平成23年3月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
放射能検査について	1	感染症・疫学情報課
感染症発生動向調査における電子申請について	1	感染症・疫学情報課

2 追加・更新記事（平成23年3月）

平成23年3月に追加・更新した主な記事は、5件でした(表3)。

表3 平成23年3月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
3月 8日	感染症に気をつけよう（3月号）	追加
3月 8日	衛研 Q&A ー流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)編ー	追加
3月10日	横浜市麻疹情報 平成22年号	追加
3月18日	横浜市インフルエンザ等流行情報 11号	追加
3月23日	ノロウイルスによる感染性胃腸炎について	追加

【 感染症・疫学情報課 】